

## 思春期における保健体験学習の効率的な実施と評価を どのようにすべきか—ふれあい体験学習の場合—

(分担研究：乳幼児期からの情緒の形成に関する研究)

松橋 有子

### 要 約

中学生に乳児健診に参加させ赤ちゃんとの触れ合いを経験させ、高校生には赤ちゃんを保育所で触れ合わせた。また、大学生には、幼稚園で幼児との遊びを体験させた。これら体験の前後に「赤ちゃんのいる家族を想像して絵を描いてください。」という教示のもとに絵を描かせ前後の比較を行った。中学生、高校生、大学生それぞれに特異的な描画の傾向が見られた。赤ちゃん、育児などに対する認識の年齢的变化が現れていると思われるが、これらの結果から、高校時代に保育所で体験させるのが最も効果的であると思われた。

### 見出し語

赤ちゃん 描画 触れ合い体験

### ■ 目 的

昨年に引き続き、乳幼児とのふれあい体験学習の前後に描画テストを実施して体験学習の効果を判定できるかどうか調べるのが目的である。方法＝ふれあい体験に参加した中学3年生63名(男子36名：女子27名)、高校2年生00名(男子61名：女子39名)および大学3年生(女子39名)が対象である。体験学習の後に、B5版白紙を横に使用してHBの鉛筆で、「赤ちゃんのいる家族を想像して絵を描いてください」と指示し、2枚の描画を比較検討した。

### ■ 結 果

体験前に比較して体験後によりポジティブな絵

になっていたのは、大学生71.7%、高校生85.0% (男子80.3%：女子92.3%)、中学生66.7% (男子80.6%：女子48.1%)であった。このように差がでたことについては、つぎのようなことが考えられる。

①ふれあい体験の行われた場所が、中学生は乳児健診の場、高校生は保育所、大学生は幼稚園であったこと。乳児健診の場では母親がそばにいたので、中学生が遠慮してしまうか近寄りにくいのではないか。保育所、幼稚園では母親の目を気にする必要はない。

②乳児より幼児の方が、一緒に遊べるし楽しかったのではなかろうか。

③中学生は3年生であったせいか、自分のことで精一杯で子どもを思いやる余裕がないように考えられた。高校受験や思春期における心身の変化に

表1 ふれあい体験前後の描画の変化 (中学生)

	全体(%)	男子(%)	女子(%)
1. 家族と子どもの関係がよかった	19(30.2)	15(41.7)	4(14.8)
①子どもを抱っこしていた	6	5	1
②子どもに近づいていた	6	5	1
③子どもが父母の真ん中になった	4	4	0
④子どもと遊んでいる絵になった	2	0	2
⑤子どもと手をつないでいた	1	1	0
2. 父母と子の絵から片親と子の絵になった	8(12.7)	0(0)	8(29.7)
3. 子どもが成長していた	6(9.5)	4(11.1)	2(7.4)
4. 親あるいは子どもの表情がよくなっていた	6(9.5)	1(2.8)	5(18.5)
5. 子どもの数が増えていた	5(8.0)	5(13.9)	0(0)
①1人→2人	4	4	
②1人→3人	1	1	
6. 片親と子の絵から家族全員の絵になった	4(6.3)	3(8.3)	1(3.7)
7. 変化なし	4(6.3)	3(8.3)	1(3.7)
8. 前と後と逆ではないかと思われる絵	4(6.3)	0(0)	4(14.8)
9. 動きのある楽しい親子の絵になった	1(1.6)	1(1.6)	0(0)
10. 子どもだけだったのが家族も加えられた	1(1.6)	0(0)	1(3.7)
11. 判定不能	5(8.0)	4(11.1)	1(3.7)
計	63(100)	36(100)	27(100)

対処するのでいっぱいなのであろう。とくに女子でポジティブな変化が少なかったのは、平凡に母親になるだけではない自分の将来についての可能性を考えていたからかもしれない。高校生になると、少し余裕がでてくるのであろう。

④大学生は広島大学生でそのほとんどが家政教育学科の学生であった。高校生は広島大学附属高校2年生、中学生は公立中学3年生。したがって高校生は一般的ではなく、特殊な環境にいる高校生であったといえる。

⑤父母と子から片親と子になった絵は、必ずしも全部が楽しそうでなくなったという訳ではないが、乳幼児期だけでなくつねに育児には両親で関わっていくべきであると考え。片親ばかりにまかせきりにしておく、そのひずみは思春期に

なって一気にふきだしてくる。自分一人で頑張っ  
て育てなくていい、両親で協力して育てていくべきであるという教育も必要であらう。

図1は男子中学生の描いたものである。体験前と後と比較すると、子どもは成長しているが、大きくなると高い山に登れといわれる、そうではなくてもっと愛情が欲しいと訴えているかのように感じとれる。

図2は女子中学生の描いたものである。赤ちゃんの時は、両親でみているのに、少し大きくなると母親だけでみるようになる。そんな現実からは目をそむけたい。横向きの人物は現実を直視していない状態を表している。

図3は男子高校生の描いたものである。体験前には声だけであったのが、後には絵の中央にいて赤

表2 ふれあい体験前後の描画の変化 (高校生)

	全体(%)	男子(%)	女子(%)
1. 親あるいは子どもの表情がよくなった	20(20.0)	14(23.0)	6(15.4)
2. 子どもが成長していた	16(16.0)	8(13.1)	8(20.5)
3. やんちゃな子どもの絵を描くようになった	14(14.0)	6(9.8)	8(20.5)
4. 家族と子どもの関係がよくなった	13(13.0)	11(18.1)	2(5.1)
①子どもの世話をする絵になった	4	3	1
②子どもと遊んでいる絵になった	4	4	0
③子どもの位置が父母の真ん中になった	5	4	1
5. 変化なし	5(5.0)	3(4.9)	2(5.1)
6. 片親と子どもの絵が家族全員の絵になった	5(5.0)	3(4.9)	2(5.1)
7. 拡大家族から核家族になった	5(5.0)	3(4.9)	2(5.1)
8. 動きのある楽しい親子の絵になった	4(4.0)	2(3.3)	2(5.1)
9. 子どもの数が増えていた	3(3.0)	1(1.6)	2(5.1)
①1人→2人	2	0	2
②2人→3人	1	1	0
10. 親が若返った(自分が親になったような)	3(3.0)	0(0)	3(7.8)
11. 子どもだけだったのが家族も加えられた	2(2.0)	1(1.6)	1(2.6)
12. 判定不能	10(10.0)	9(14.8)	1(2.6)
計	100(100)	61(100)	39(100)

表3 ふれあい体験前後の描画の変化 (大学生)

	全体 (女子のみ) (%)
1. 子どもが成長していた	10(25.6)
2. 父母と子の絵から片親と子の絵になった	7(17.9)
3. 家族と子どもの関係がよくなった	6(15.4)
①子どもと遊んでいる絵になった	2
②父が母子に近づいた	2
③子どもが父母の真ん中になった	1
④子どもを抱っこしていた	1
4. 子どもの数が増えた	6(15.4)
①1人→2人	5
②3人→2人	1
5. 親あるいは子どもの表情がよくなった	4(10.2)
6. 親が若返った絵になった	2( 5.1)
7. 動きのある楽しい親子の絵になった	1( 2.6)
8. 判 定 不 能	3( 7.8)
計	39(100)

ちゃんをあやしている。

図4は女子高校生の描いたものである。体験前に比較して両親が若返っている。後の母親は、前で赤ちゃんをあやしていたおねえちゃんのように見える。高校生が自分の将来を思い描いて描いたようにもとれる。

図5は大学生の描いたものである。体験前には硬

かった表情が、後にはすっかりなごやかになって、しかも子どもの数も一人から二人に増えている。

## ■ 結 論

ふれあい体験は、保育所で高校生の時期に行うのがもっとも効果的であると考えられる

図1 男子中学生の描画

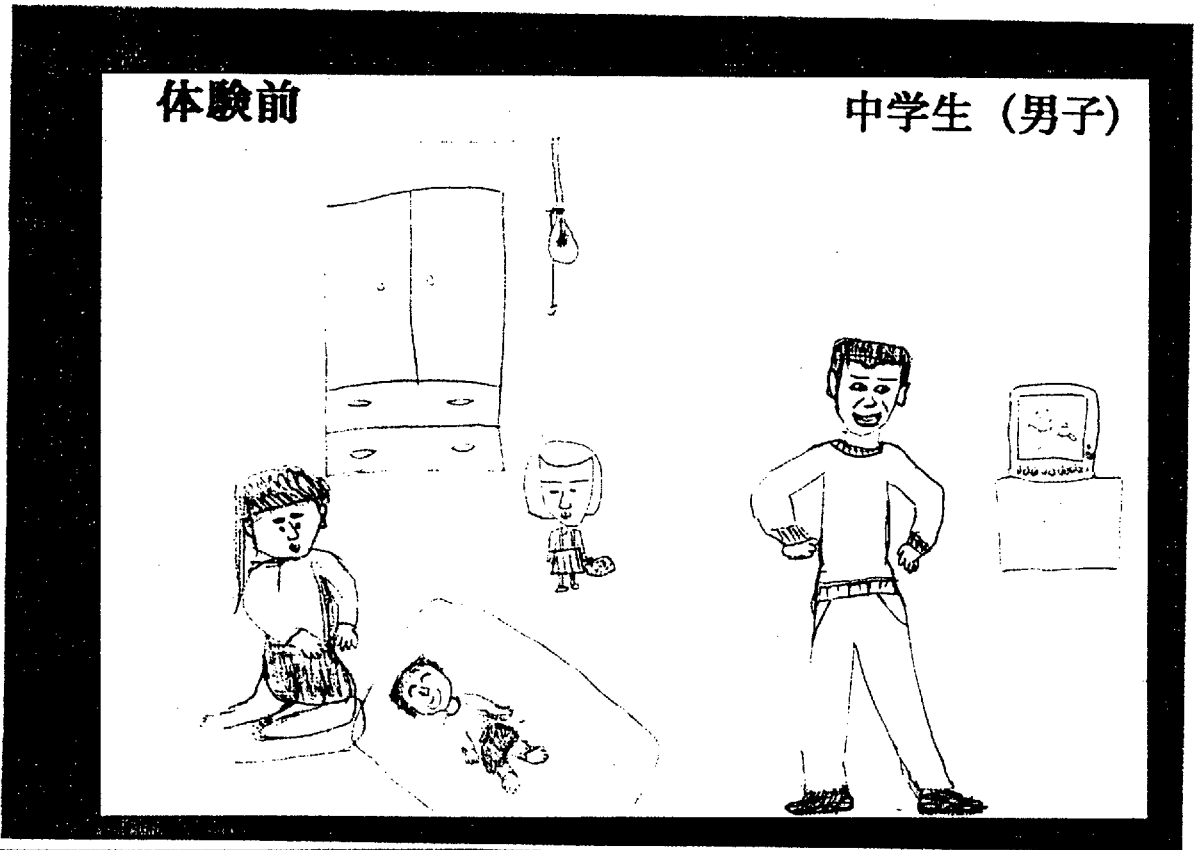
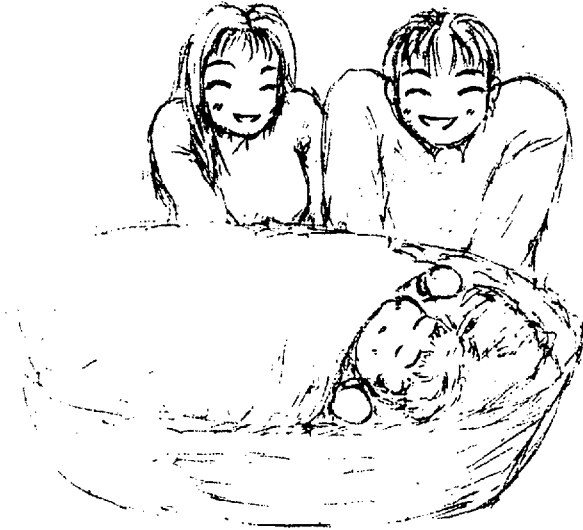


図2 女子中学生の描画

中学生（女子）

体験前



中学生（女子）

体験後



図3 男子高校生の描画

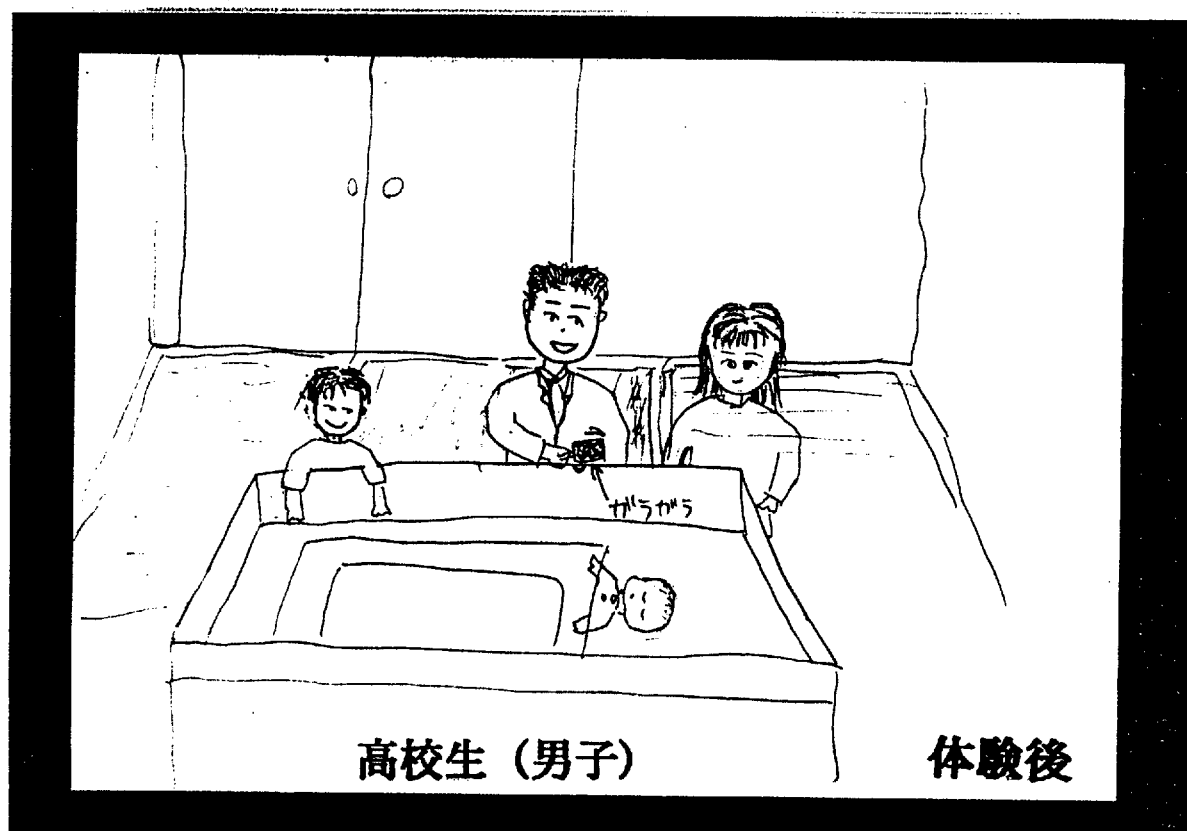
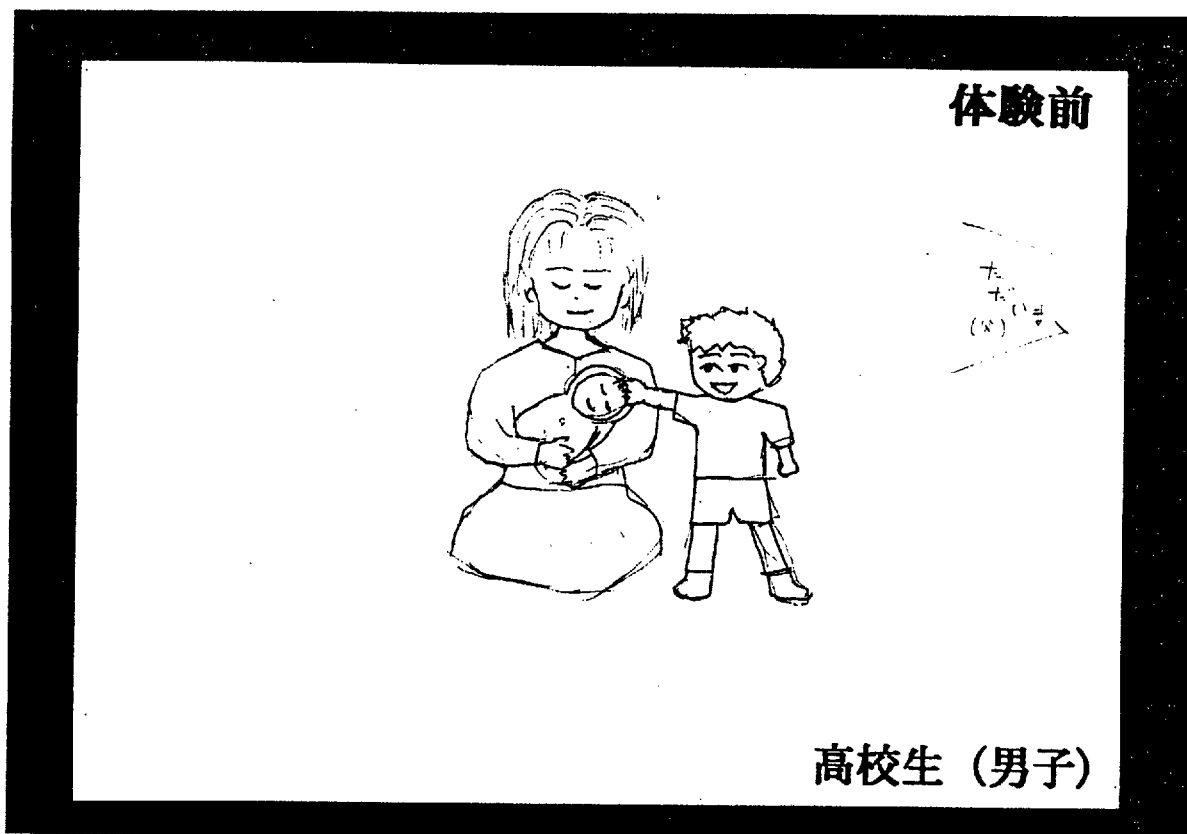


図4 女子高校生の描画

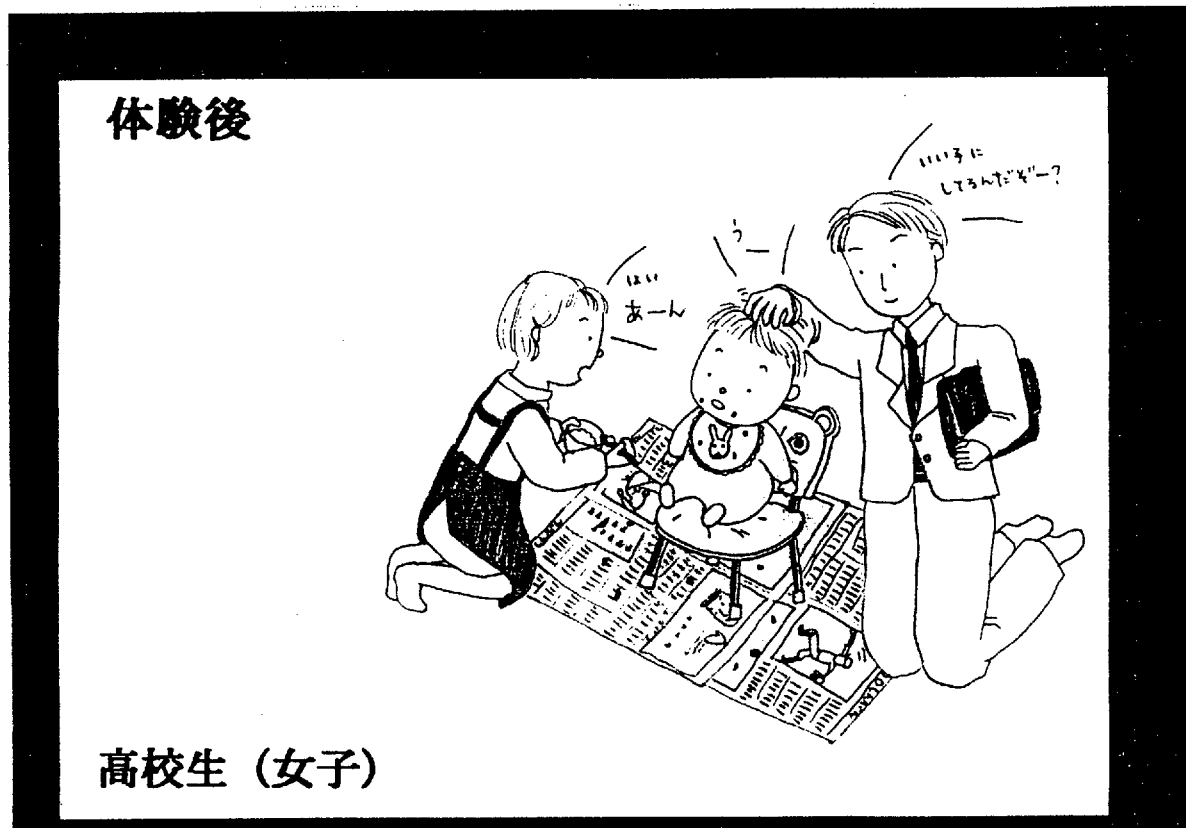
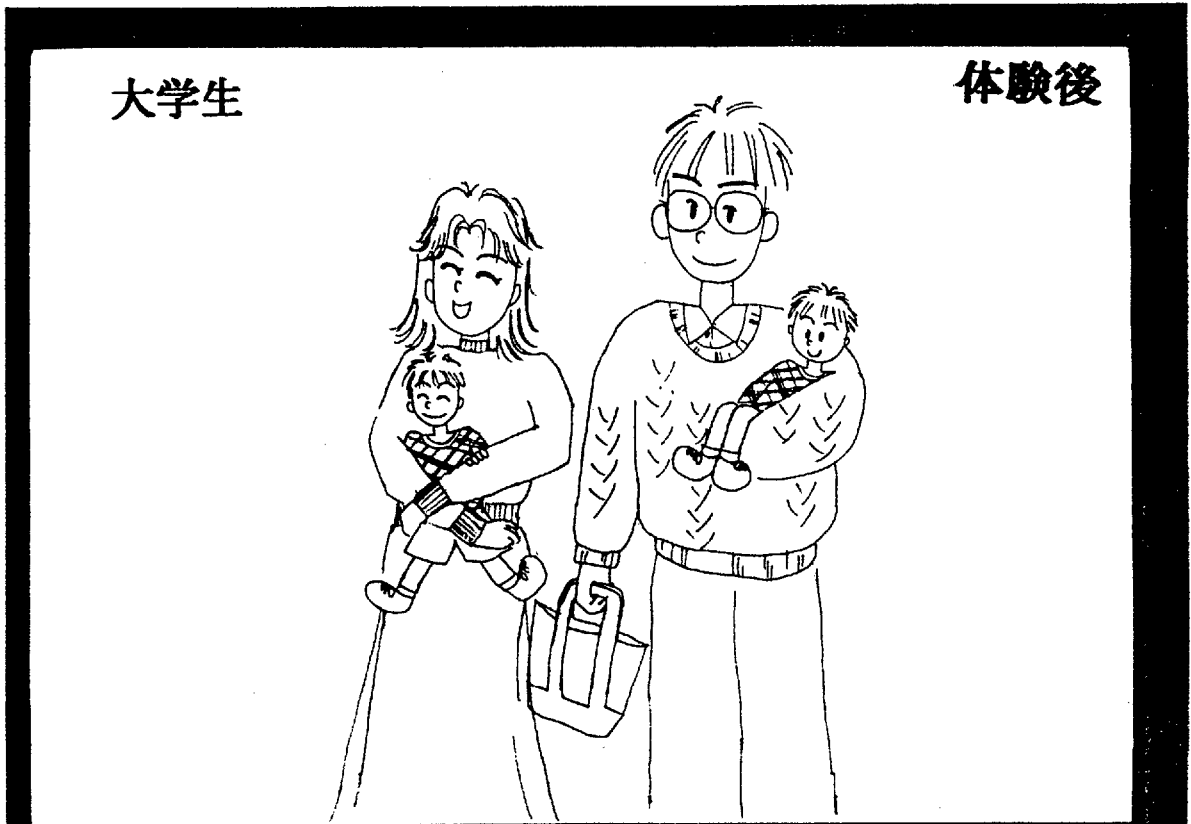
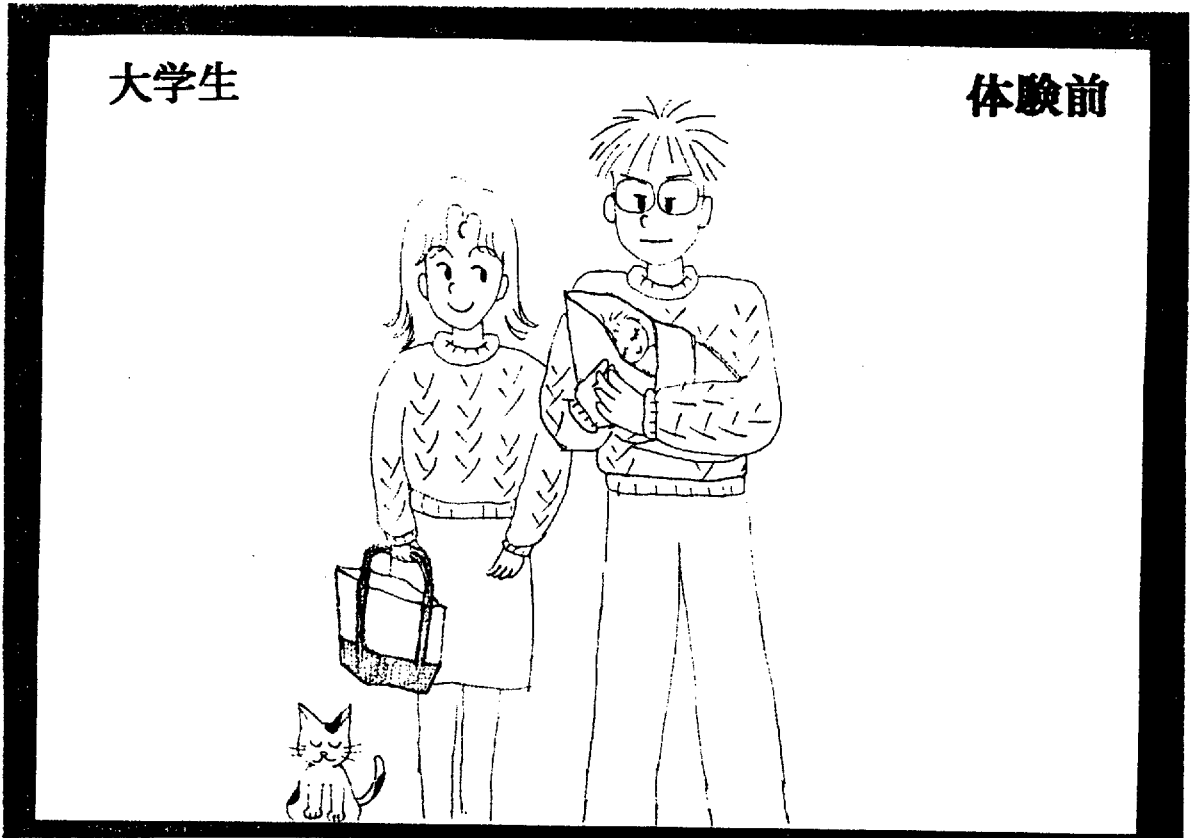


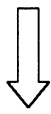


図5 大学生の描画





## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用 論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



### 要 約

中学生に乳児健診に参加させ赤ちゃんとの触れ合いを経験させ、高校生には赤ちゃんを保育所で触れ合わせた。また、大学生には、幼稚園で幼児との遊びを体験させた。これら体験の前後に「赤ちゃんのいる家族を想像して絵を描いてください。」という教示のもとに絵を描かせ前後の比較を行った。中学生、高校生、大学生それぞれに特異的な描画の傾向が見られた。赤ちゃん、育児などに対する認識の年齢的变化が現れていると思われるが、これらの結果から、高校時代に保育所で体験させるのが最も効果的であると思われた。